

【研究ノート】1870年代の小新聞投書者について

石 堂 彰 彦

1. はじめに

本稿では、1870年代における小新聞の投書者に関して、詳細な検討を行なう。同時期の小新聞投書者に関しては、土屋礼子による詳細な研究がすでに存在する¹。そこで本稿は土屋の方法を踏襲しつつ、投書者の職業や地域構成についていっそう探求を深めることで、新たな知見を得ることを目的とする。

まず調査対象および方法について述べておく。調査対象とした小新聞は、『読売新聞』『東京絵入新聞』『仮名読新聞』（以下、それぞれ『読売』『絵入』『仮名読』と略記）である²。調査対象期間は1874（明治7）年から1879（明治12）年までとした。この期間の各紙に掲載された投書の投書者について、その経歴や投書地を調査した。

土屋による調査はきわめて緻密で網羅的だが、今日、投書者についての調査環境は充実してきたといえる。その理由はいくつかある。ひとつは、人名辞典の充実である。多くの人名辞典をひとつにまとめた人名辞典も出版されている。また明治・大正期の人名録の復刻版も数多く刊行されている³。ふたつめは、インターネット環境の充実である。とりわけ国会図書館のデータベースは、近年急速に拡充されており、国会図書館の「リサーチ・ナビ」では、各種データベースを一括で検索できる⁴。それ以外でもネット上には人名データベースを公開しているサイトがあり⁵、また一般のネット上の情報も使い方に注意すれば十分に活用できる。むしろすべての人名辞典、人名録がネット上で利用できるわけではないため、

手作業の部分も少なからずある。しかしネット環境の整備は、調査者にとって大きな励みであり力でもある。

以下では、2章で投書者の職業を、3章で投書者の投書地について、それぞれ検討していく。

2. 投書者の職業的傾向

表1は、1874年から1879年までの『読売』『絵入』『仮名読』に投書が掲載された投書者のうち、職業や族籍が判明した者の一覧である。この時期の新聞には多数の投書が掲載されており、前述の通り土屋礼子はその投書者について調査している。そのため表1には、土屋が提示した投書者58名に、今回の調査によって職業や階層が明らかとなった投書者146名を加えた合計204名を掲げている⁶。今回新たに判明した投書者の多くは投書掲載数が1件であり、10件以上の者は15名である。なお同期間の三紙全体の投書者総数・投書総数を表2にまとめた⁷。三紙全体の投書者総数の約5%、投書掲載数では約36%を占める投書者の経歴が判明したことになる。

表1をもとに、土屋によってすでに指摘されている点⁸から検討していこう。まず投書者が特定の一紙に投書する傾向は、ほぼ同様である。たとえば投書掲載数2件以上10件以下の者は58名いるが、そのうち41名が一紙のみの掲載となっている。投書掲載数の多い者が新聞・雑誌に関係する傾向が強いことは、今回の調査でも同様である。さらに、商人の多さ（204名中52名）、年齢構成の偏りの小ささ（1820年代から50年代までの10年ごとに生まれた者の数はいずれも25名前後）についても、ほぼ同じとってよい。その他、推定も含めた族籍の比率（士族が55名、平民が73名）、江戸出身者の割合が高いことなど（江戸75名、その他67名）、傾向はほとんど変わらない。

次に職業の傾向をみていこう。戯作や俳諧など芸能・文芸関連の投書者が多いことはすでに指摘されているとおりである。表1ではとくに官吏および教育関連、医療関連の者について一覧にしている。まず官吏は32名、教育関連では15名いる。明治前期には知識人読者のなかでも官吏と教員

がとりわけ多かったとされるが⁹、読者にかぎらず投書者においてもそうした傾向があったといえるだろう。

教育関係者について、加えて特徴的であるのは、15名のうち11名が『読売』のみに投書が掲載され、『読売』を含めた複数紙に投書が掲載されているのは2名、残り2名は『絵入』のみに投書が掲載されている点である。官吏ではこれほど顕著な傾向はみられない。教育関係者が『仮名読』で非常に少ないのは、「洒落過て居る」¹⁰といわれた『仮名読』独特の文体が、教員などに受け容れられなかったためと思われる。

さらに医師・医療関係者についてみると、教育関係者より多い19名にのぼっている。しかもそのうちの16名は『読売』のみに投書が掲載されており、『読売』に投書がないのは2名しかいない。『読売』はコレラ予防など衛生関連の記事を重視しており、それが東京府に認められて1880（明治13）年には『東京日日新聞』とともに「東京府公布」欄を設けることとなったといわれる¹¹。『読売』に医師の投書が多いのは、こうしたことと無縁ではないだろう。また医師の投書では、薬の処方や病気など専門的話題が多い。1877（明治10）年のコレラ大流行をはじめ伝染病が頻発した近代初期において、医師に対する需要が大きかったことや、医師がみずから近代医療に関する情報を発信し、人びとを啓蒙していく必要を感じていたこともその一因だったのではないだろうか。

以上のように、小新聞三紙全体としては、今回の調査においても先行研究で指摘された傾向が認められた。他方で『読売』は他の二紙にくらべて、教員や医師といった投書者が比較的多数存在した。『読売』は「東京の商人を中心にかなり幅広い読者をもっていた」¹²とされるが、投書者の職業に関してはより具体的に明らかになったといえよう。読者としての官吏や教員の多さが、投書者にもある程度反映しているように思われる点も興味深い。とくに医師の多さについては、先行研究でもまったく言及されることがなかった。投書者としての医師の多さが、官吏や教員のように、『読売』の読者層の幅広さを前提としたものであるかどうかは不明だが、読者層と投書者層の関連はさらに掘り下げていく必要があるだろう¹³。

3. 投書者の地域的傾向

前章では投書者の職業の傾向について検討したが、本章では投書者の地域的な傾向について検討してみたい。

すでにみたように、経歴の判明した投書者に関しては、江戸出身者が多かった。では投書者全体ではどうだろうか。じつはこの点についても土屋がすでに言及している。小新聞三紙について、「投書者の7-8割が東京府内の在住者または在留者」であり、「東京府および横浜以外の地方からの投書は1割前後で、非常に少ない。この傾向は『仮名読』『東京絵入』『読売』の順に強い」¹⁴と述べている。なお読者に関しては、『読売』読者は「関東を中心に地方にもかなり進出している」¹⁵ともいわれる。

全体の傾向はこのように指摘されているが、では具体的にどのような地方にどの程度の投書者がいたのかは明らかになっていない。そこで土屋と同様に、投書の末尾に署名とともに記された住所を手がかりとして、投書者の投書地を調査した結果が表3である。投書者数3,735名のうち、2,926名（一部推定含む）について掲げている¹⁶。

一見してわかるように、東京の投書者が圧倒的に多い。ついで多いのが横浜である。また地方ごとでは、やはり関東地方がもっとも多い。ただし『読売』は千葉、埼玉という東京の隣接県が多いのは当然といえようが、北関東では栃木が圧倒的に多く、埼玉と同数になっている点が目を引く。

全国に目を向けると、『読売』がいずれの地方にもある程度の投書者を獲得している。また京都、大阪という大都市圏、東海道の静岡、愛知で多くなっている。だが山梨県はそれらの府県をしのぎ、横浜、千葉につぐ投書者数となっている。山梨は比較的早くから新聞が盛んになった地域のひとつであり、投書者も新聞に投書することに抵抗がなかったとも考えられる。

表3をもとに三紙を詳細に比較するのは、投書地の判明した投書者が『読売』にかなり偏っているため問題があるが、『絵入』と『仮名読』にはそれほど大きな違いはない。そこでこの二紙についてみると、『絵入』は少ないながらも東北地方から九州地方まで投書者を獲得しているが、『仮名

『読』は、近畿の兵庫以西からの投書がまったくない点が際立っている。むろん、投書地が特定できなかった投書者に、西日本の投書者が含まれている可能性もある。そのため断定は難しいが、おそらく投書者がいない理由には、仮名垣魯文特有の文体やスタイルが大きく関係しているように思われる。

西田長寿は、この時期の小新聞には3つの型がみられるとし、「読売型」「東京絵入型」「かなよみ型」を提示した¹⁷。読売型に含まれる新聞としては、『朝日新聞』や『浪花新聞』、絵入型は『西京画入新聞』や『大阪絵入新聞』を挙げている。つまり、『読売』『絵入』の編集スタイルが大阪、京都といった関西圏で受容されたということである。これに対してかなよみ型では、『仮名読』と『いろは新聞』しか挙げられていない。『いろは』は東京で発行され、『仮名読』の事実上の後身新聞として、仮名垣魯文が編集に関係した新聞である。すなわちかなよみ「型」といっても、その型を真似て新聞を製作できるのは仮名垣魯文しかいなかったといえる。だが一方で表3の投書状況を見るかぎりでは、西日本圏で広く受容される見込みのない、かなよみ型新聞を発行する者が現れなかったと考えることも可能であるように思われる。

以上、投書者の地域的な傾向について検討してきた。ほとんどの点に関しては、先行研究の指摘どおりであったといえるだろう。だが、とくに『読売』について、栃木や山梨における投書者数のように、若干不規則なかたちで投書の盛んな地域がある点は注意すべきだろう。たとえば山梨県の投書者について、なぜ京都や大阪をしのぐほどの投書者が存在したかについては、投書内容のみでは判然としない。こうした点については、地域ごとの新聞受容のありかたについて、より詳細な検討が必要といえるだろう。

4. おわりに

本稿では、1870年代の小新聞三紙の投書者について、従来よりも詳細な検討を試みた。多くの点で通説どおりの結果となったが、いくつかの点では新たな知見を得られたように思われる。

第一に、読者層と投書者層の関連である。第2章ではその可能性を示すにとどまったが、もし読者の階層構成が投書者の階層にもある程度反映されているのであれば、逆に投書者層から読者層の手がかりを得ることができるかもしれない、という点である。

第二に、投書者の地域構成に関する点である。投書者は、それぞれの地域にまんべんなく存在しているわけではなく、地域によっては特徴的な傾向を示すことがあった。だが、ある地域に投書者が多い理由を明らかにするためには、その地域における新聞の発行状態だけでなく、読者の側の新聞に対する意識、さらにはこの時代に特有の近代化に対する意識など、同時代の人びとがおかれた社会状況について、総体としての探求が必要であろう。投書者数の問題は、そのひとつの要素に過ぎないともいえる。しかし、投書者を追究することで、読者の新聞受容の状況を明らかにできれば、それは読者の同時代への視線を明らかにすることにあるいはつながっていくかもしれないのである。

表1 投書者の投書掲載数と経歴

	主な筆名	本名または通称	投書掲載数				出身地	族籍	生没年	著作	投書時前後の職業					
			読売	絵入	仮名読	計					商人	医師	教育	新聞	官吏	職業詳細ほか
*	1	高嶋屋塘雨、華睡庵	野田千秋	138	207	63	408	江戸※	士族	1831-1882		○		○	○	書肆※、官吏※、著述業※、
*	2	中坂のまとき、半漁生	中川真節	80	234	78	392	膳所藩	士族	1845※-1883			○	○	私塾、根津神社	
*	3	前島和橋、風柳閑人	前島柳之助	52	77	37	166	江戸	平民	1837-1906	○			○	画工、絵草子屋	
*	4	南新二、北古三	谷村要助	27	105	0	132	江戸	士族	1835-1895	○			○	通運会社社員	
*	5	狂文亭春江、為永春江	為永春江	0	27	76	103	江戸※	士族	1813-1889	○				戯作者	
*	6	風也坊、蕪嬢	広島久七	21	20	58	99	江戸	平民	1825-1891	○	○			煙草商	
*	7	会田皆真	会田瀧次郎	21	24	52	97	江戸	平民	1848※-1916※	○	○			提灯問屋	
*	8	琴通倉康楽	杉山孝次郎	35	9	32	76	江戸※	平民	1831-1886	○			○	狂歌師	
*	9	転々堂主人、足薪翁	高島藍泉	52	21	2	75	江戸	士族	1838-1885				○	戯作者	
	10	西村賢八郎、通新舎	西村賢八郎	53	0	21	74	江戸※	士族	1845頃-?					元彰義隊十八番隊長	
*	11	浮川福平	竹内福之輔	25	16	31	72	—	—	1851※-?				○	—	
*	12	伊東橋塘、船橋屋専三	伊東専三	8	14	31	53	江戸	平民	1850-1914	○	○		○	菓子商、戯作者	
*	13	贅々亭湖山、中沢小さん	中沢三吉	36	13	2	51	—	—	—		○			酒問屋雇人	
*	14	竹窓閑人	中村正恭	22	25	4	51	岡山※	士族	1858-1880				○	—	
*	15	晴雪居士、尚生	渡辺尚	36	11	0	47	姫路	士族	1856-1912	○				川崎造船所	
*	16	かな井安善、仮名居安善	尾張屋徳右衛門	7	0	38	45	江戸※	平民	1825-1906		○			材木商	
*	17	わかな、倭仮名小僧	若菜貞爾	2	3	34	39	千葉	平民	1854-1918	○			○	官吏※、著述業※	
*	18	幸堂得知、来々舎得知	高橋平兵衛	36	1	1	38	江戸	平民	1843-1913	○			○	三井銀行、劇評家	
*	19	米洲	清水市次郎	0	0	35	35	—	平民	—	○	○		○	書肆、戯作者	
*	20	花川戸岩床	藤田岩次郎	19	0	12	31	江戸※	平民	—					髪結床	
*	21	山田風外、賴生	山田孝之助	14	5	10	29	江戸	平民	1853-1923				○	羅紗問屋	
*	22	神奈垣魯文、赤神三馬	仮名垣魯文	4	25	0	29	江戸	平民	1829-1894	○			○	『仮名読』編集長	
*	23	野崎左文	野崎城雄	1	8	20	29	高知	士族	1858-1935	○			○	工部省鉄道寮出仕、戯作者	
*	24	中村一能、鍛の屋一農	中村一能	20	1	7	28	岐阜	—	1842-1927				○	警視庁、狂歌師、地主	
*	25	芳川生、芳川俊雄	芳川俊雄	24	0	0	24	武蔵	士族※	1844-1924	○			○	元藩校教授、外務省、戯作者	
	26	東屋柳塘、素学堂菊之	小林広重	3	3	17	23	—	—	—					俳諧師※	
	27	山崎福同	山崎福同	15	7	0	22	静岡※	士族	—	○			○	—	
*	28	林稲之助	早井?	13	0	9	22	—	平民	—					—	
*	29	岸田吟香、銀二	岸田銀次	12	7	2	21	岡山	平民	1833-1905	○	○			薬商	
*	30	一斎陸中	岡本起泉	1	7	13	21	江戸	平民	1853-1882					戯作者	
	31	石場瓢斎、瓢斎古麗	石場有恒	9	9	0	18	—	—	—				○	俳人	
*	32	つばめ、真砂つばめ	富田砂燕	0	1	16	17	横浜※	平民	1838-1900		○			貿易商	
*	33	楽清	楽清楽	1	0	15	16	—	—	—					陶器製造	
	34	小羅浮舎主人、香雪散人	前田健次郎	0	16	0	16	江戸	士族	1841-1916	○				『絵入』編集長、国学者、美術史家	
	35	屈伸子、能吟	岡田治助	0	15	1	16	江戸	—	? -1904		○		○	薬商※、俳人	
	36	永倉勝清、永倉かつ	永倉勝清	1	11	3	15	—	—	? -1895				○	画家、狂歌師	
*	37	響庭、猿村生	響庭与三郎	14	0	0	14	江戸	平民	1855-1922	○			○	『読売』記者、著述業	
*	38	東杵庵、東杵庵月彦	穂積勝重	12	1	1	14	江戸	士族	1825-1892					俳諧教導職(楡少講義)	
	39	花笠雨燕	出羽夷智	0	0	14	14	萩	士族	1844-1909				○	陸軍中尉	
	40	星野康斎	星野康斎	13	0	0	13	広島※	士族※	—			○	○	医師	

【研究ノート】1870年代の小新聞投書者について

	主な筆名	本名または通称	投書掲載数				出身地	族籍	生没年	著作	投書時前後の職業				
			読売	絵入	仮名読	計					商人	医師	教育	新聞	官吏
	41 左官鏡丸	柳沢貞吉	13	0	0	13	江戸※	—	—						左官
*	42 流花翁	岡本長之	13	0	0	13	江戸	士族	1816頃-1881				○	○	開拓権少書記官
	43 会津舎杏村、黒部杏村	黒部利兵衛	0	4	9	13	—	—	—	○					宿屋商、漆器商
	44 後藤直、後藤なほし	後藤昌直	0	11	1	12	美濃	—	1857-1908	○	○				後藤昌文の子、医師
*	45 秋琴琴緒依	津久井吉左衛門	9	0	3	12	江戸※	平民	1848-1914		○				頼面商、狂歌師
	46 面堂、平野面堂	平野屋松恵	11	0	0	11	—	—	—						狂歌師
	47 鹿山人、柳亭燕枝	長島伝次郎	10	0	1	11	江戸	平民	1838-1900	○					落語家
	48 伊東燕勢、仙東燕勢	野沢善次郎	9	1	0	10	—	—	—						講談師
	49 岡田霞船、隠見亭霞船	岡田良策	4	4	2	10	江戸※	平民	—	○					著述業※
	50 江馬活室、藤室主人	江馬元益	9	0	0	9	美濃	士族※	1806-1891			○			元藩医、本草学者
*	51 蓬室、岡野伊平	岡野伊平	6	0	3	9	江戸	平民	1824-1886	○					国学者、狂歌師
	52 紫芳、瓢乎山人	加藤瓢乎	8	0	0	8	岐阜	—	1856-1923	○			○		「読売」記者、翻訳家
*	53 松涛翁、墨水居	平野忠八	7	0	1	8	江戸※	平民	1823-1906		○				袋物商、狂歌師
	54 広橋要携	広橋要携	7	0	0	7	—	士族	1842-?						—
*	55 服部留吉	服部留吉	5	0	2	7	—	平民	1863※-?		○				菓子商雇人
*	56 小山草鳳	小山代三郎	0	0	7	7	—	—	?-1878				○		「仮名読」記者
*	57 梅星叟、对梅宇乙彦	萩原語一郎	0	0	7	7	江戸	士族	1826-1886	○				○	俳人、戯作者
	58 石坂白玄、可伸庵	石坂知一	0	4	2	6	上野	士族※	1827-1876			○			俳諧教導職
*	59 西山嵐松、尾上庵嵐松	西山利助	0	0	6	6	—	平民	?-1879		○				—
	60 島村泰	島村泰	5	0	0	5	岩槻	士族	—	○			○	○	大蔵省官吏
	61 橘鳴郷	橘鳴郷	3	0	2	5	—	—	—	○				○	著述業※
	62 柳塙堂	臼田正秋	0	5	0	5	兵庫	士族	1836-1910						国学者
	63 鈴木彦、彦々堂	鈴木彦之進	4	0	0	4	千葉	士族	1843-1899				○		「読売」記者、劇評家
	64 山脇颯	山脇颯	4	0	0	4	岡山	士族※	1856※-?	○			○	○	新聞記者
*	65 放誕子	加藤九郎	3	0	1	4	大坂	士族※	1830-1890				○	○	開拓使御用掛
	66 友得	平田友得	0	4	0	4	—	—	—				○		「絵入」社長
	67 正風社亭々	松田曉松	0	4	0	4	常陸	—	1825-1888	○				○	俳人
	68 角利助、高志摩鳥羽	角利助	0	4	0	4	三重	平民	1853-1928	○				○	のち衆議院議員
	69 山本有所	山本誉吉	0	4	0	4	上野	平民	1837-1901						篆刻家、書画家
*	70 竹田早苗	竹田錠三郎	0	1	3	4	—	—	—				○		「仮名読」記者
*	71 岡丈紀	河原英吉	0	0	4	4	府中	平民	?-1890	○				○	工部省鉄道寮技手、著述業
	72 多麻園	岩見鑑造	3	0	0	3	—	—	1842-1904						狂歌師
	73 熊小僧、熊童子	仮名垣熊太郎	3	0	0	3	江戸	平民	1858頃-1886	○			○	○	工部省鉄道寮
	74 岡三慶	岡道	3	0	0	3	江戸	平民	—	○		○			漢学者
	75 古川正雄、古川氏	古川正雄	3	0	0	3	広島	士族	1837-1877				○	○	築地海軍兵学校教官
	76 松井延昌	松井総兵衛	3	0	0	3	—	—	—	○	○				砂糖金平糖商
	77 文心堂	柴田量平※	3	0	0	3	群馬	—	—		○				書肆、読売新聞売捌所
*	78 六代目川柳	水谷金蔵	2	1	0	3	江戸	平民	1814-1882	○	○				魚問屋
*	79 小原燕子	小原燕子	2	0	1	3	—	平民	?-1882				○	○	フェリス学校教師、国学者
*	80 松村春輔	松村春輔	2	0	1	3	長州	平民	?-1887頃※					○	戯作者
*	81 古面翁	藤木彦八	2	0	1	3	江戸	平民	1799-1881	○					仕立職、狂歌師
	82 千種庵、稲垣秋吉	佐野恒七	1	0	2	3	—	—	1838-1899		○				仕出屋、狂歌師
	83 雪中庵梅年	服部幸次郎	0	3	0	3	江戸	—	1826-1905	○	○				足袋商、俳人

成蹊人文研究 第22号 (2014)

	主な筆名	本名または通称	投書掲載数				出身地	族籍	生没年	著作	投書時前後の職業						
			読 光	絵 入	假 名 読	計					商人	医師	教育	新聞	官吏	職業詳細ほか	
	84	四竜訥	四竜訥治	2	0	0	2	江戸※	—	1854-1928	○						のち音楽教育者、音楽雑誌発行
	85	吉岡善吉	吉岡善吉	2	0	0	2	—	—	—							品物配達所
	86	筑波庵	荒川繁樹	2	0	0	2	—	—	1824-1886							狂歌師
	87	八十六歳美堯	内田美堯	2	0	0	2	—	—	1794-1884							歌人
	88	永井碌々翁	永井碌	2	0	0	2	静岡※	平民	1855-1922	○			○	○		「読光」記者
	89	千秋堂愛竹	小本村司	2	0	0	2	盛岡	士族	1817-1904	○						狂歌師
	90	松崎晋二	松崎晋二	2	0	0	2	江戸	平民	—	○						写真師
	91	植村泰通	植村泰通	2	0	0	2	—	士族	—	○					○	地主、官吏※
	92	片岡総兵衛	片岡総兵衛	2	0	0	2	江戸※	—	—		○					宿屋商
	93	内藤順成	内藤真文	2	0	0	2	甲斐	—	—			○				医師
	94	瓢池園	河原徳立	2	0	0	2	江戸	—	1844-1914						○	実業家(窯業)・内務省勸業寮
*	95	中村ゞ太	中村万吉	2	0	0	2	江戸※	平民	1825-1898							唄師
	96	琴の舎しら辺	—	1	0	1	2	—	—	—							狂歌師
	97	竹芝浦人、狐軒打安	鈴木伝蔵	1	0	1	2	江戸	—	? -1912頃							狂歌師
*	98	時雨庵古笠	田端?	1	0	1	2	江戸	—	1811-1896							俳諧教導職
	99	霞亭乙湖	西田伝助	0	2	0	2	江戸	平民	1836-1910		○			○		書店番頭
*	100	古川魁菴子	古川精一	0	2	0	2	江戸	士族	1854-1908	○				○	○	著述業
	101	楽亭西馬	小笠原常樹	0	0	2	2	三重※	—	—							—
	102	友昇	森田太四郎	0	0	2	2	武蔵	—	1834-?	○	○					彫師商、俳人、教導試補
	103	狸腹庵都々美	松本弥三郎	0	0	2	2	江戸	士族	1838-1890							画工、狂歌師
*	104	久保田彦作	久保田彦作	0	0	2	2	江戸※	士族	1846-1898	○				○		歌舞伎作者
*	105	肥塚龍	肥塚龍	0	0	2	2	兵庫	(僧侶)	1851-1920	○				○		のち衆議院議員
	106	深町茂太郎	深町茂太郎	1	0	0	1	—	—	—							製糸業
	107	中村仲蔵	—	1	0	0	1	江戸	—	1809-1886							歌舞伎役者
	108	竹川弁中	竹川弁中	1	0	0	1	—	—	—							僧侶
	109	三宅三代鶴	—	1	0	0	1	—	—	—							芸妓
	110	雁金屋	青山清吉	1	0	0	1	—	—	—			○				書肆
	111	鈴木源兵衛	鈴木源兵衛	1	0	0	1	—	—	—		○					菓子商
	112	桃川燕林	吉野万之助	1	0	0	1	江戸	平民	1846-1905	○						講談師
	113	蘭竹草堂	—	1	0	0	1	—	—	—							医師
	114	田村雪	田村雪	1	0	0	1	—	—	—			○				医師
	115	吉住頼武	吉住礼助	1	0	0	1	岐阜	士族※	—						○	教部省官吏
	116	岩上亭	鈴木平六	1	0	0	1	江戸	—	1827-1902		○					唐物商、狂歌師
	117	蕉窓老人	三島雄之助	1	0	0	1	江戸	平民	1852-1914							日本画家
	118	成島柳北	成島惟弘	1	0	0	1	江戸	士族	1837-1884	○				○		漢詩人
	119	田鎖綱紀	田鎖綱紀	1	0	0	1	盛岡	士族	1854-1938						○	工部省鉱山寮
	120	四方梅彦	四方新次	1	0	0	1	江戸	平民※	1822-1896	○	○					酒商、戯作者
	121	五姓田芳柳	浅田岩吉	1	0	0	1	江戸	士族	1827-1892							画家
	122	松本万年	松本政秀	1	0	0	1	武蔵	平民	1815-1880	○		○	○	○		漢学者、東京師範学校教授
	123	畠山如心	畠山如心齋	1	0	0	1	江戸	士族	? -1883	○						国学者
	124	青木	青木可笑	1	0	0	1	名古屋	(僧侶)	1825-1881	○					○	漢学者、漢詩人、官吏
	125	筆の屋文多	渥美兼吉	1	0	0	1	江戸※	平民※	—		○					筆墨商、狂歌師
	126	絵馬屋	中村半兵衛	1	0	0	1	日野宿	平民	1841-1904		○					茶店、狂歌師(三世絵馬屋)
	127	額翁	田村貞治	1	0	0	1	越後	—	1821-1890	○	○					古着商、狂歌師(二世絵馬屋)
	128	五窓楼	竹内喜一郎	1	0	0	1	信濃	平民※	1798-1883							俳人、教導職試補
	129	安部真貞	安部卯吉	1	0	0	1	長州	士族※	1819-1893	○					○	国学者、宮内省
	130	近藤芳樹	近藤晋一郎	1	0	0	1	周防	士族	1801-1880	○			○			国学者、歌人、宮内省
	131	飯塚寛齋	飯塚寛齋	1	0	0	1	—	—	—			○				漢方医※

【研究ノート】1870年代の小新聞投書者について

	主な筆名	本名または通称	投書掲載数				出身地	族籍	生没年	著作	投書時前後の職業				
			読売	絵入	仮名読	計					商人	医師	教育	新聞	官吏
132	石黒忠恵	平野恒太郎	1	0	0	1	岩城	士族	1845-1941	○	○		○		軍医、のち軍医総監・貴族院議員・子爵
133	石崎房吉	石崎房吉	1	0	0	1	—	—	—						上絵職
134	市原茂右衛門	市原茂右衛門	1	0	0	1	—	—	—						地主
135	堀口嘉蔵	堀口嘉蔵	1	0	0	1	—	—	—						地主
136	伊藤本支	伊藤本支	1	0	0	1	—	—	—	○	○				軍医※
137	伊藤弥兵衛	伊藤弥兵衛	1	0	0	1	—	平民※	—		○				酒露油商
138	いとや又兵衛	糸屋又兵衛	1	0	0	1	—	平民※	—		○				薬商
139	梨本重助	梨本重助	1	0	0	1	—	平民※	—		○				薬商
140	江馬春熙	江馬春熙	1	0	0	1	美濃	士族※	?-1901	○	○				江馬元益の甥
141	扇面亭	扇面亭伝四郎	1	0	0	1	江戸※	平民※	?-1881	○	○				青画材料商
142	大畑弘国	大畑弘国	1	0	0	1	紀伊	(宮司)	1844-1913	○					国学者、男山八幡宮少宮司
143	秋山和光	秋山和光	1	0	0	1	江戸	士族	1818-1883	○					歌人
144	岡野利兵衛	岡野利兵衛	1	0	0	1	静岡※	平民	—		○				茶商
145	小沢善平	小沢善平	1	0	0	1	江戸※	平民	1840-1904	○	○				果樹園経営・果樹販売
146	勝山忠雄	勝山忠雄	1	0	0	1	—	—	—	○		○	○		東京大学医学部教員
147	河辺藤七	河辺藤七	1	0	0	1	—	—	—		○				そば店※
148	久保田貫一	久保田貫一	1	0	0	1	但馬	士族	1850-1942				○	○	のち外務官僚、埼玉県知事等
149	桑田衡平	桑田衡平	1	0	0	1	武蔵	士族※	1836-1905	○		○		○	元藩医、軍医、内務省、赤坂区会議員
150	雀志	斎藤銀蔵	1	0	0	1	江戸	—	1851-1908	○				○	三井銀行、俳人
151	子安たかし	子安峻	1	0	0	1	美濃	士族	1836-1898				○	○	日就社(『読売』発行元)社長、外務省
152	新宮誠二	松山誠二	1	0	0	1	和歌山	平民	—	○		○	○		東京大学予備門教諭
153	高野積成	高野積成	1	0	0	1	甲斐	平民	1846-1909						殖産家(養蚕、ぶどう)
154	瀧沢米賀	瀧沢勘兵衛	1	0	0	1	江戸※	—	1820-1895						狂歌師
155	田中正賢	田中正賢	1	0	0	1	—	—	—			○			羊肉商
156	辻平兵衛	辻平兵衛	1	0	0	1	—	—	—			○			油商※
157	橘門	秋月龍	1	0	0	1	豊後※	士族	1809-1880	○					元藩校教授、漢学者、下総葛飾県知事
158	並河松翁	並河松翁	1	0	0	1	—	—	—			○			医師
159	西川平蔵	西川平蔵	1	0	0	1	—	—	—		○				質商、地主
160	藤屋甚兵衛	藤屋甚兵衛	1	0	0	1	—	—	—			○			紅商・国旗売捌商
161	枳屋伊助	枳屋伊助	1	0	0	1	—	—	—			○			瓦斯ランプ商
162	広岡屋亀吉	広岡屋亀吉	1	0	0	1	—	—	—			○			瓦斯ランプ商
163	四方堂親	四方堂親	1	0	0	1	—	—	—			○			瓦斯ランプ商
164	森棋園	森立之	1	0	0	1	福山※	士族※	1807-1885	○		○		○	元藩医、国学者、本草学者、文部省
165	柳下織右衛門	柳下織右衛門	1	0	0	1	埼玉※	平民※	—						戸長
166	結城国足	結城平左衛門	1	0	0	1	会津	士族	1800-1888				○		歌人(和歌教授)
167	吉川賢太郎	吉川賢太郎	1	0	0	1	出雲※	平民	—	○					神官※
168	脇山義保	脇山義保	1	0	0	1	岩手※	平民	—	○				○	のち岩手県議会議員
169	花時	三浦義方	1	0	0	1	信濃	—	1845-1884				○		『いろは新聞』記者
170	柏木探古	柏木貸一郎	1	0	0	1	江戸	平民	1841-1898					○	内務省
171	宮島陸一郎	宮島陸一郎	1	0	0	1	長野※	平民	—	○					—
172	鈴木祐次郎	鈴木祐次郎	1	0	0	1	—	—	—		○				煙草売捌所

成蹊人文研究 第22号 (2014)

	主な筆名	本名または通称	投書掲載数				出身地	族籍	生没年	著作	投書時前後の職業					
			読光	絵入	假名読	計					商人	医師	教育	新聞	官吏	職業詳細ほか
	173 藤井綴明	藤井綴明	1	0	0	1	江戸※	士族	—	○						医師
	174 竹内無覚	竹内無覚	1	0	0	1	—	—	1819頃-?	○		○				権少講義
*	175 松の門三草子	小川みさ	1	0	0	1	江戸	平民	1832-1914	○						歌人
*	176 鱧氏	鈴木元邦	1	0	0	1	千葉	平民	1823-1898	○						漢詩人
*	177 山々亭有人	條野伝平	1	0	0	1	江戸	平民	1832-1902	○				○		戯作者
	178 杉田玄端	吉野拡	0	1	0	1	江戸	士族※	1818-1889	○		○	○			元藩医、私立病院院長 女子師範学校教授、 松本政秀の長女
	179 松本荻江女史	松本睦	0	1	0	1	埼玉	平民	1851-1899	○			○			
	180 小築庵春湖	橘田実茂	0	1	0	1	甲斐	—	1814-1886	○						俳諧教道職
	181 久保田米徳	久保田寛	0	1	0	1	京都	平民	1852-1906	○			○			日本画家
	182 江本嘉兵衛	江本嘉兵衛	0	1	0	1	江戸※	平民	—	○						著述業※
	183 河竹新七	吉村新七	0	1	0	1	江戸	平民	1816-1893	○						歌舞伎作者
	184 狂言堂如皋	瀬川如皋(三世)	0	1	0	1	江戸	平民	1806-1881	○						歌舞伎作者
	185 辻岡文助	辻岡文助	0	1	0	1	江戸※	平民	—	○	○					書肆
	186 青山光貞	青山光貞	0	0	1	1	—	—	—	—					○	神奈川県職員
	187 三平二満	千村万次郎	0	0	1	1	—	—	—	—						狂歌師
	188 石川正身	石川正身	0	0	1	1	—	士族	—	○					○	駅通寮官吏
	189 金井潭	金井潭	0	0	1	1	長野	—	1840-1908						○	「横海」記者、 養蚕家、 「信飛新聞」 編集長
	190 塚原靖	塚原靖	0	0	1	1	江戸	士族	1848-1917	○					○	著述業
	191 須藤南翠	須藤光暉	0	0	1	1	宇和島	士族	1857-1920	○				○		著述業
	192 白石千別	小野勝太郎	0	0	1	1	江戸	士族	1817-1887	○				○		元外国奉行・ 下総守、国学者
	193 内田弥兵衛	内田弥兵衛	0	0	1	1	江戸※	平民	—	○	○					書肆
	194 羽田野敬雄	源常陸	0	0	1	1	三河	(神官)	1798-1882	○					○	権大講義、 国学者
	195 市川团十郎	堀越秀	0	0	1	1	江戸	平民	1838-1903							歌舞伎役者
	196 洪井徳兵衛	洪井徳兵衛	0	0	1	1	—	平民	—			○				薬商、町絵代人
	197 塚本勝七	塚本勝七	0	0	1	1	—	平民※	—			○				薬商
	198 月崎勤造	月崎勤造	0	0	1	1	—	—	—					○		雑誌記者
	199 無極庵	無極庵瀬平	0	0	1	1	—	平民※	—			○				そば店
	200 語石庵精知	広田精知	0	0	1	1	江戸	平民	1828-1886	○	○					貸本商、俳人
*	201 今泉雄作	今泉雄作	0	0	1	1	江戸	士族	1850-1931	○				○		のち美術史家
*	202 永機	穂積善之	0	0	1	1	江戸	平民	1823-1904	○						俳諧師
*	203 柳亭仙果	篠田久次郎	0	0	1	1	江戸※	平民	1837-1884	○				○		戯作者
*	204 彩霞園柳香	広岡広太郎	0	0	1	1	大坂	—	1857-1902	○				○		戯作者

(注1) 欄外の「*」は土屋礼子(2002)前掲書、120-121ページの表で提示された投書者、表中の「—」は不明、「※」は推定を示す。
 (注2) 「著作」「投書時前後の職業」欄では、1870年代から1880年代にかけて著された著作、携わった職業を主に掲げている。「教育」は私塾経営者も含む。「新聞」には新聞・雑誌に編集者・記者として関係した者を示している。

【研究ノート】1870年代の小新聞投書者について

表2 小新聞三紙の投書掲載数
および投書者数

	投書掲載数	投書者数
読売	4,187	2,673
絵入	2,064	710
仮名読	1,560	516
総数	7,811	3,735

(注)1人が複数紙に投書していることもあるため、投書者数の総計は各紙の投書者数を単純に合計した数より少ない。

表3 小新聞三紙の都道府県別投書者数

	読売	絵入	仮名読	県別合計	
東北地方	北海道	1	0	0	1
	青森県	1	0	0	1
	岩手県	2	1	0	3
	宮城県	3	0	0	3
	秋田県	9	2	1	12
	山形県	1	0	0	1
関東地方	福島県	3	1	0	4
	茨城県	3	1	0	4
	栃木県	15	0	1	16
	群馬県	5	2	0	7
	埼玉県	15	3	1	19
	千葉県	34	2	0	36
	東京都	1,711	430	273	2,414
	(横浜)	94	14	65	173
	神奈川県	13	3	6	22
	新潟県	7	2	2	11
中部地方	富山県	1	0	0	1
	石川県	3	0	0	3
	福井県	0	1	0	1
	山梨県	28	2	1	31
	長野県	7	2	3	12
	岐阜県	6	0	0	6
	静岡県	18	5	2	25
	愛知県	13	3	2	18
近畿地方	三重県	5	3	1	9
	滋賀県	2	0	0	2
	京都府	15	1	2	18
	大阪府	19	3	5	27
	兵庫県	9	1	0	10
	奈良県	4	1	0	5
	和歌山県	2	2	0	4
中国地方	鳥取県	0	0	0	0
	島根県	0	0	0	0
	岡山県	5	1	0	6
	広島県	1	3	0	4
	山口県	1	1	0	2
四国地方	徳島県	0	0	0	0
	香川県	0	0	0	0
	愛媛県	2	0	0	2
	高知県	0	0	0	0
九州地方	福岡県	0	1	0	1
	佐賀県	0	0	0	0
	長崎県	4	2	0	6
	熊本県	1	0	0	1
	大分県	1	0	0	1
	宮崎県	1	2	0	3
鹿児島県	1	0	0	1	
新聞別合計(延べ)	2,066	495	365	2,926	

注

- 1 土屋礼子 (2002) 『大衆紙の源流』世界思想社、同 (1991) 『『仮名読新聞』投書欄の詩歌と作者たち』『一橋論叢』105 (2)、155-174ページ。
- 2 各紙の創刊年月および紙名の変遷は以下のとおり。『読売』1874年11月、『絵入』1875年4月 (1875年4月『平仮名絵入新聞』→同年9月『東京平仮名絵入新聞』→翌年3月『東京絵入新聞])、『仮名読』1875年11月 (1875年11月『仮名読新聞』→1877年3月『かなよみ])。『仮名読』は、1877年3月に東京に移転するまで横浜で発行された。他はすべて東京で発行されている。なお各紙の調査にあたって、以下の資料を利用した。『読売』: データベース (読売新聞メディア企画局データベース部 (1999) 『明治の読売新聞』)。『絵入』: 原紙 (昭和女子大学近代文庫所蔵)、マイクロフィルム (国会図書館所蔵)。『仮名読』: 『かなよみ』(復刻版) 山本武利監修 (1992年) 明石書店。
- 3 注4、5で示しているもの以外で、調査に用いた人名録・人名辞典等のタイトルと発行年のみ以下に示す (巻号は省略)。『諸芸人名録』(1875年)、『官員録 (明治9年2月改正)』、『地主名鑑 第1集』(1876年)、『東京府区町総代人名録』(1877年)、『東京名工鑑』(1879年)、『大日本商人録 東京・横浜之部』(1880年)、『改正増補 明治文雅都鄙人名録』(1882年)、『府県会議員姓名録』(1883年)、『慶応義塾出身名流列伝』(1909年)、『現代人名辞典』(1912年)、『大阪現代人名辞書』(1913年)、『大日本人物誌』(1913年)、『東京掃苔録』(1940年)、『幕末維新人名事典』(1978年)、『近代人物号筆名辞典』(1979年)、『杏雨書屋蔵書目録』(1982年)、『名家伝記資料集成』(1984年)、『大日本書画名家大鑑』(1991年)、『国書人名辞典』(1993-1999年)、『新訂増補 人物レファレンス事典 明治・大正・昭和 (戦前) 編』(2000年)、『新訂増補 号・別名辞典』(2003年)、『人物レファレンス事典 郷土人物編』(2008年)、『新訂増補 人物レファレンス事典 明治・大正・昭和 (戦前) 編2 (2000-2009)』(2010年)、『徳川幕臣人名辞典』(2010年)、『幕末維新大人名事典』(2010年)。その他人名録・人名辞典以外で用いた資料は以下のとおり。『地方別日本新聞史』(1956年)、『明治建白書集成』(1986-2000年)、野崎左文 (2007) 『私の見た明治文壇』平凡社、梅本塵山 (1935) 『明治の投書家』『本道楽』108号。
- 4 たとえば、明治期の新聞を調査する際の必携書である宮武外骨・西田長寿 (1985) 『明治大正言論資料 20 明治新聞雑誌関係者略伝』みすず書房は、本文中に数多くの筆名・別号が記載されているにもかかわらず、それらの索引がないという欠点があった。しかし「リサーチナビ」では、それらを含めて検索できるようになっている。ほかにも大植四郎 (1971) 『明治過去帳』東京美術などの人名索引がデジタル化されている。
- 5 とくに皓星社 (<http://www.libro-koseisha.co.jp/>) のサイトでは、同社が刊行している『日本人物情報大系』のかなりの部分の人名を検索できる (「被伝記者索引」)。また「コトバンク」(<http://kotobank.jp/>) でも、複数の人名辞典を横断検索できるよ

【研究ノート】1870年代の小新聞投書者について

になっている。

- 6 表1では、原則として姓名または筆名のほかに、2つ以上の要素（たとえば住所と職業）が投書以外の史資料によって確認された者を掲げている。本稿における投書および投書者の定義は次のとおり。「投書」「寄書」などの見出しを付けられた投書欄内に掲載され、かつ文頭に「○」印が付けられ、文末に署名のあるひとまとまりの文章を、「1件」の投書とする。1件の投書に署名として記載された姓名あるいは筆名を、「1名」の投書者とする。1件の投書内に署名が複数ある場合は、それぞれを別個の投書者として数える。投書に署名がないか、あるいは判読不可能な場合は、その投書の投書者は1名とする。この定義はあくまで原則であり、実際の紙面にはこれに当てはまらないものもある。また土屋が示した投書者の情報には、今回の調査で明らかになった情報を加えているが、その投書者59名のうち、「松堂」が「間部詮勝」であるかどうかについて、住所や投書内容からは確認できなかったため、表1では除外した。
- 7 表2に掲げた投書者数は、調査期間が1年少ないにもかかわらず、土屋礼子（2002）前掲書、118ページで示された投書者数（『読売』2,650名、『絵入』688名、『仮名読』539名）より多くなっている（土屋の調査では1880年までが調査対象）。考えられる原因としては、投書・投書者の数え方が異なっている可能性が挙げられる。とくに前記注で示した原則に当てはまらない投書でその可能性がある。また本調査では読売新聞社メディア企画局データベース部編（1999）『明治の読売新聞』読売新聞社を用いたが、土屋の調査時点（大元の論文初出は1992年）ではこのデータベースは当然利用できないため、確認に用いることのできる紙面がデータベースのほうが多くなっている可能性もある。なおこのデータベースでは、1878年9月15日の付録4ページ分が、1876年9月15日にも誤って追加されているため投書7件が重複しているが、本調査では重複分は除いている。
- 8 土屋礼子（2002）前掲書、113-129ページ。
- 9 山本武利（1981）『近代日本の新聞読者層』法政大学出版局、190-191ページ。
- 10 『絵入』1877年6月10日。
- 11 社史編纂室編（1955）『読売新聞八十年史』読売新聞社、122-123ページ。
- 12 山本武利（1981）前掲書、72ページ。
- 13 なお、執筆、監修あるいは翻訳者として書籍などの著作に関わった者は103名と非常に多くなっているが、この点について付言しておく。この時期の書籍などの奥付には、著者名のほか、住所、族籍がほとんどの場合併記されており、投書者に著作が多いことは、それらの情報を投書者の経歴調査で利用したことと大きく関係している。つまり著作があったからこそ、投書者の経歴が判明したというケースも少なからずあり、著作者の多さはなるべくしてなった結果なのである。
- 14 土屋礼子（2002）前掲書、117ページ。
- 15 山本武利（1981）前掲書、72ページ。
- 16 表に掲げなかった投書者の内訳は、住所記載がないなどの不明分904名、一時的な寄

留地を示すと思われる「在～」(「在大阪」など)70名、アメリカ2名、「九州」1名である。投書の住所記載に関しては土屋も触れているが(土屋礼子(2002)前掲書、127ページの注7、8)、住所に「在～」といった表記がない場合でも、旅行滞在先などの住所を記載している可能性は残されている。なお当時は「府県」のみだが、この時期の府県の範囲は非常にめまぐるしく変化したため、投書の住所を当時の府県と対照させることがきわめて困難である。そのためここでは便宜上現在の「都道府県」の境界区分を用いている。

¹⁷ 西田長寿(1961)『明治時代の新聞と雑誌』至文堂、54-64ページ。